

---

# 魔法少女シロクロ

たけひろ君

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法少女シロクロ

### 【Nコード】

N3880S

### 【作者名】

たけひろ君

### 【あらすじ】

天城ミウは普通の小学6年生。平和で満ち足りた生活に満足しつつも「何かが変われば良い」そう思いつつも日々を過ごす普通の少女。少女が一人の青年と出会うときその日常が大きく変わる。

敷島ショウジは魔法使い。日常と非日常が交錯する世界で魔法の杖の代わりに漆黒の刃を振るい、異形の敵を切り刻む。青年が一人の少女と出会うときその運命が大きく変わる。

二人は出会い二人は戦う、今青年と少年の物語が始まる！

## ガール・ミーツ・ボーイ

黒一色に塗りつぶされた空にそびえる巨大な塔のような化け物。

「なに・・・・・・・・あれ・・・・・・・・」

それを呆然と眺める少女の視線の先には黒い外套を身に纏った青年が一人。青年は手に持った長剣を構え化け物に向かい走り出す。

「待つて・・・・・・・・駄目だよ！」

咄嗟に青年に向かって叫ぶ、だが青年の耳に声は届かない。青年はさらに速度を上げて駆ける。

「駄目・・・・・・・・駄目だよ！」

塔のような化け物から無数の槍のような触手が青年を突き殺さんと迫る。それを青年は手にした長剣で斬って斬って斬り伏せる。やがて青年は無数の槍に囲まれその足が止まる。

「あ・・・・・・・・そんな・・・・・・・・」

青年は助からない、もう駄目だそう少女は思った。しかし青年は獣のような咆哮をあげ触手で出来た檻を切り裂く。

「もう・・・・・・・・もう止めて・・・・・・・・」

祈り虚しく青年は再び化け物に向かって駆ける。数を増した触手に時に薙がれ飛ばされながら長剣を構えひた走る。

「駄目・・・・・・・・止まってよ・・・・・・・・」

ついに青年は化け物の膝元まで辿り着く。獣のような咆哮をあげながら塔のように巨大な化け物を斬りつける。やがて化け物から今までに無い大量の触手が青年に向かって打ち出された。

「そ・・・・・・・・そんな」

少女の目に涙が溢れた、青年のことは知らず、この世界が何なのかも知らずただただ涙が溢れた。やがて大量の槍の動きが止まった、潮のように退いて行く槍の後には長剣を杖にした今にも倒れんとする青年の姿があった。

その青年をめがけて再び無数の触手が撃ち出された

「止めてー！ー！ー！ー！」

少女の世界は光に包まれた……………

「ゆ……………夢！？……………だよね？」

少女がいたのはいつもと変わらないベットの上、朝の光。先ほどまでのものは夢であつたのだろう、そう思い目をこするうと目じりに指を当てた。

「あれ、涙出てる……………」

何故だろう、見たことも無い世界であつたことも無い青年が戦い敗れたただそれだけの不思議な夢が少女にはいやに悲しかった。「あの夢は何だったのだろうか」寝起きの頭でぼんやりと考えてみるが答えは出るはずも無く時間だけが過ぎていった。

「これ以上考えても仕方ない」そう思い少女は起き上がり朝の支度を始めた、今日こそが運命を変える日だと知らずに……………

平和で平和で何も起こらないこの世界、帰るべき家があつて迎えてくれる家族がいて、温かいご飯が出て。そんなふうに恵まれたこの世界。毎日毎日惰性で、習慣で学校に行つて授業を受けて仲の良い友達とおしゃべりして、そうして帰りがけにすこし寄り道をしてそしてさよならまた明日するこの世界。

とても平和でとても幸せで、でもちよっぴり退屈な世界。「少し何か変われば良い」そう思う自分がいて「何も変わらず生きていきたい」そう思う自分もいる。

そんな世界のそんな学校で私、天城ミウはうつらうつらとしていきます。

「……………ここで $4/3$ と $7/8$ を掛けると分母は $8 \times 3$ で $24$ 、分子は $4 \times 7$ で $28$ となりますこれを約分して……………」

先生の声が随分遠くに聞こえる、ストーブに熱せられた教室、ただん意識が……………

「この問題は……出席番号1番の天城さんにやっていただき  
ましょう」

「え！……あ……えっと……その……  
……聞いてませんでした……」

「問題は2/7×4/9ですよ」

「あ、8/63です次からは気をつけてくださいね」

クスクスと隣で笑い声が聞こえます、隣に目をやれば親友のユキ  
コちゃんが笑っています

「笑わないでよユキコちゃん。居眠りする回数はユキコちゃんのほ  
うが多いんだから」

「あら、2時間目から寝てるミウがよく言っわ」

「ひどい！寝てるのが分かったんなら起こしてくれても良いのに  
！」

「嫌よ、だって私ミウの寝顔を見るのが趣味なんだもん」

「いやな趣味、ユキコちゃんなんて嫌い！」

「嫌いで結構、もうお菓子作っても呼んであげないんだから」

「そ〜れ〜は〜困る〜」

こんなふうに関の一日は過ぎてゆきます。こんなふうにならず  
と私の日常が続いていく……。今はまだこう思ってい  
ました。

## アントラクト

「ふいー、今回も変なところに巣を張ってやがったな畜生」

夕暮れの空の下、一人の青年が学生服にくっついた蜘蛛の巣やら埃  
やらを払いつつ薄暗い路地裏から這い出した。

「ったくよ、昨日から気配があつたから昼から学校サボってまで探  
してやったのにとんだ雑魚野郎だったぜ」

青年はぶつぶつと呟きながらオレンジ色に染まった市内随一の商

店街を青年は闊歩する。そのうちにふと薄汚い路地裏の前で立ち止まりポケットに手を突っ込み黒く丸い小さな宝石を取り出す。青年はじっとその宝石を睨む、すると宝石はぼつと光り始めた。

「おっと、本日2発目だ」

青年は路地裏へと消えていった。

「じゃあねユキコちゃんまた明日！」

「また明日」

時刻は夕刻、ミウはユキコと別れて家路についているところだった。その日はなんともなしに早く帰れたかったので近道となる路地裏へ入った。

「今晚のおかずは何だろう?」「明日はどんなことをしてユキコちゃんと遊ぼうか」そんなことを考えながら何度も使ってきた近道を歩む。もうすぐで路地裏の中ごろと言ったところだろうか、彼女の世界は一変した……………

続く

## ガール・ミーツ・ボーイ（後書き）

どうもこんにちはたけひろです。

この小説前にも全く同じタイトルであるのですが……設定とかちゃんとしなかったからかだんだん書くうちに破綻すると言う状況になってしまいましたので書き直すことにしました。

今回は後先考えて作っているので今までの奴よりは……まじになると思いまする。  
と言っわけでまた次回。

## ファースト・コンタクト

ぐにやり、視界が一瞬歪にゆがんだ。

「え．．．．．？」

長く座った後の強い立ちくらみのような感覚がミウを襲った。少し体がふらつく。何があったのか分からないままあたりを見渡した。そこは．．．．．先ほどの路地裏ではなかった。

「どこ．．．．．ここ．．．．．」

不気味に薄暗く大量のトーテムポールが立ち並ぶ空間にたった一人でミウは立ちすくんでいた。その中に遠くに一本だけ巨大なトーテムポールが聳え立っている。

ズモ．．．．．、巨大なトーテムポールが動いたように見えた．．．．．いや、動いた。

「え．．．．．？」

ズモ．．．．．、ミウの周囲に立っていたトーテムポールまでもが動き出した。ズモ．．．．．ズモ．．．．．悪いことにトーテムポール徐々にミウの周りに接近してくる。

「こ．．．．．来ないで！」

ズモ．．．．．ズモ．．．．．ズモ、近寄ってくるトーテムポールの数がさらに増える。遠くに見えていた巨大なトーテムポールもかなり近くなっている。

今まで震えながらも何とか気力を保って立っていたミウだがそれも既に限界となりへたりこんでしまった。そのうちにもトーテムポールはミウを囲み円状に並び、遠かった巨大なトーテムポールはもうあと10mと言うところまで迫っていた。

「もう駄目だ」そう思った、ここがどこなのかは分からないしこのトーテムポールが何なのかも全く分からない。それでも「自分はもう駄目だ」そう思った。「悪い夢であって」そう思いミウは目を閉じた、しかしトーテムポールがその輪を狭めるべく動いている音



は聞こえた、さらに他よりも大きな音で巨大なトーテムポールが目前に迫っていることが分かってしまう。ミウはさらに強く目を瞑った。

その時だった、ガラガラと何かが崩れる音が背後からする。恐る恐る目を開けてみると目前まで迫っていた巨大なトーテムポールは4mほどのところで歩みを止め、周りを囲っていたトーテムポールも動くを止め、その沢山彫られた顔を全てミウの真後ろへと向けていた。

「な………に………?」

ミウも後ろを向いた、そこにいたのは………真つ黒な外套を纏い、真つ黒な一本の長剣を持った青年。その姿はまるで昨日の夜に見た夢の中でたった一人戦いに赴く青年のまま。

「誰か巻き込まれたのは分かったが間に合ってよかつぜ。大丈夫かお嬢さん?」

口元に微笑を浮かべ余裕の表情でつかつかとミウに歩み寄る青年。ミウに近寄る間に一本のトーテムポールが驚異的な跳躍で青年に襲い掛かったが事も無く長剣で切り裂きミウを抱き起こした。

「だ、誰?」

「さあな、ジョン・ウェインとでも名乗っておこうか。ここで大人しくしといてくれよ、2分でいつもの日常に戻してやるからさ」  
「さもなんでもないように青年は言う」と手にした長剣を構え、手近なトーテムポールから切り裂いていく。ついにミウの周りを囲っていたトーテムポールたちはバラバラの木っ端となり、残るは巨大な一本のみとなった。

「さーて、残るはデカブツだけか?刻んでさっさと終わらせてやるよ!」

青年は長剣の柄を握り直すとトーテムポールとの距離を一息で詰め一閃、トーテムポールを真つ二つに叩き斬る。

しかしトーテムポールは達磨落としのように長さが詰められただけで健在だ。

「クソッ」悪態をつくともう一閃もう一閃とトーテムポールの長さを詰め終いには自分の膝ほどの高さになったトーテムポールに長剣を突き刺し空中に放り投げ落ちてくるトーテムポールを縦に真つ二つに両断。

青年は長剣を振り刀身にまわりついた木っ端を振り落とすと虚空に消してしまった。と、その途端に今までいたトーテムポールばかりの荒涼とした空間はいつの間にかもとの路地裏となっていた。

「お嬢さん、大丈夫か？」

青年はミウを抱き起こし無事を問う、「だ、大丈夫です」とミウが答えると青年はその場を立ち去ろうとした。

「待ってください」

ミウは青年を呼び止める、

「さっきの・・・さっきのってなんだっただんですか？」

どうしても先ほどのことが信じられなかったからだ。

「夢さ、悪い悪い白昼夢さ」

青年はそれだけ言い残すと足早に立ち去っていた……………

「な、なんだったの？」

残ったのは謎と路地裏を駆け抜ける風だけだった。

## ファースト・コンタクト（後書き）

どうもお久しぶりです。

今回は短めであります、前まで書いていたシロクロとは話の流れが全く違います。

理由は簡単「こっちのが書き易くね？」せっかく考えたお話もこんな奴に考えられたのでは不幸だろう……。まあ全ては僕の文章力不足の賜物なのですが。よし、国語の勉強をしよう。ではまた次回。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3880s/>

---

魔法少女シロクロ

2011年10月6日01時28分発行